

方向

第七五号 一九八七年十一月二三日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

慧 晃 律 師 (六)

赤 谷 明 海

文 雅

当時僧侶の漢籍詩文に関する知識は常識として要求せられ、風雅の道又一つの嗜みとして用意せられねばならない。特に泉涌寺の如き御由緒の寺院に出入して尊貴の方に面接し(注)、或は友として南谷照什の如きを有つ律師に於いては、詩文風雅の道自ら心得ざるを得ない。又禪に興味を寄せ、閑寂を願ふ律師に於いては、自ら進んで茶道の如きに心を向けた事も考へられる。今乏しい資料の中から師の業績を求め、以てその風格をしのんでみよう。

(注)正徳二年、近衛関白家熙公より二十五条衣を賜つてゐるが、法華寺御所の助針とある。又近衛家久公は「照山和尚にあたふ」との題名にて、「をのつからたる事を知心こそ老いすしなすの葉なりけれ」の和歌を賜ひ、又玉周へか律師へか明瞭でないものに勸修寺経慶卿の書翰があり、芍薬献上の事を記してゐるが殿上人との関係浅からざるものがある。

先づ筆蹟であるが、律師は草書が法滅の因であると言ふ古人の言に依り、又經典繕写の経験の上から楷書のみであつて、滅多に草書は用ひない。精々用ひて行書である。その楷書たるや南谷の影響を帯びて優雅な風趣を有

ち、決して硬直なものではない。幾分豎に長く、一見弱々しい感があるが、氣品のある美しさを有つてゐる。又一冊の自筆本を手にする時、そこには終始一貫、整然たる配列があつて、決して後半に筆勢の乱れるが如き事がない。嚴密にして地味な性格の流露であらう。

師の文章は漢文のみであり、時に日記類の中に仮名体を見出す位の事である。その筆蹟の如く、文章又整ひ、文法的確であり、内容は冗長を嫌つてゐるが、精詳の点に於いて欠くる所がない。

漢詩に関しては、南谷が、

「禪誦有暇則嘯咏乎泉石間賦詩粲然可睹者夥焉」(『枳橘易土集』序文)

と紹介してゐる如く、詩興到つては時として詩を賦して懷を遣つた事であらう。今はただ『江湖風月集』の朱点傍註に埋められた手沢本の上に、師の漢詩に対する深い愛着をしのぶのみであつて、詠草二枚として残つてゐない事は残念であるが、強ひて求むれば、表白類の中にその片影は窺ふ事が出来、更に幸ひに、『円巖玉周年譜』の片隅に留められた一聯がある。元禄十五年、玉周七十を迎へた元旦の事、師資相對しての贈答である。律師年四十七歳、

(照山巖旦)

王正新遯五更晨 先賀師翁壽七旬

蘇柏祝延円室裡 龜齡長保万年春

壬午元旦奉賀本師大力生從心壽 小師慧晃和南紳

(円巖和)

鳳念新啓朔元晨 寄贈佳詩祝七旬

且喜筆頭適心処 卷舒幾樂太平春

次韻照山西堂元旦 日 賀我七旬寿 円巖布衲草

律師が法金剛院住職として先づ手に入れた建物は太古亭なる茶室である。律師の撰文自筆になる扁額（太古亭記 法金剛院蔵）一面存し、初にその場所の誇るべき由緒をのべ、其処より四方を遠望した地勢の妙を讀へ、而して最後にその亭を太古と稱すべき所以を説明してゐる。終りの一節に、

「凡居処者心所依処也心孤不起起依縁縁静則心亦静故古今有德晦跡林泉韜光巖谷皆欲静其心者也居静心静則禅觀自就宝明現前」云々

と精神と環境との相互關係を述べ、太古の如き無為寂靜の中に韜晦せんとする事に心を寄せてゐるが、そこには高踏的な隱遁性と共に温雅にして無口な律師の風貌を見得る様な氣がする。ところで此の『太古亭記』にはそれが茶室であるとは書いてないが、太古亭は後世有名な茶室として文人雅人の往来絶える事なく、律師が修理した當時も恐らく茶室として整へられたものであらう。前掲『報恩院流伝日記』卷二の末に、南都の茶室に招かれてその調度等を記し残してゐる点よりしても、茶に対する心得の程も察せられ、太古亭としても専ら茶室として使用されたものと想像せられる。林泉に隠れた此の小亭に、觀誦著作に疲れた一時を、静かな沈黙のうちに過すのを楽しんでゐる一面が律師にもあつた事であらう。

後語

律師の遺弟照州の小祥忌諷誦に曰く、

（前略）前泉涌兼唐招提照山慧晃宗師者

内備三字 激勵修薰之行

外具威儀 恭懷顯密之德

願鑑真大師遺風 重挑天安燭

統正法因師正脈 再飄泉涌波

正是霧海之南針 仰亦夜途之北斗

加之 朝念弥陀之聖容 修五相成身觀

夕入大悲之三昧 擬一人一行行

誠是 十方億刹遐方 不離唯心

八万四千妙相 豈出本性

豈因 生者必滅之理 雪霜之悲碎骨

会者定離之道 風樹之恨斷腸

当今 流光一瞬倏辭去 忌景一回奄茲來

報恩弟子等 載恩荷德至深至高

〔注〕天安即ち天安寺の事、法金剛院の旧称。

剥肉難報碎骨難酬

感慨切而 慈悲愛刃 斷於寸腸

悲哀深而 愁雲淚雨 闇於双眼（後略）

是れ必ずしも文字の修飾に終つてゐるのではない。誠に律師は頭密戒禪の達者、身は頭職にありながら常に心を学事に懸け、孜々兀々として沈潜し、その業績決して軽々しいものではない。学事に対する師の情熱はあらゆる分野に亘る広範なる探究をなさしめ、或は講じ或は記し而してその性格より来る嚴密さは探究をして愈々細緻ならしめ、単なる謄写と雖も常に校正補訂を伴ひ、かくして積り行く紙数愈々多かつたであらうが、如何なる事情か世に示されるもの少く、徒らに蔵中に埋れ、あまつさへ明治の変動期に諸方へ散逸するの結果となつてしまつた。最近律師の紹介を思ひたち、法金剛院に蔵するものは悉く之を調査したが、勿論散逸の残骸のみであり、目ぼしいものは殆んど持ち去られてゐる。散逸当時書肆に見つけては買ひ求めた唐招提寺長老の持物が戒学院所蔵の物であり、その買得に漏れた中、大谷大学蔵するところの二三部以外全く所在を明かにしない。而も未だ戒学院に就いては調査が十分に行き届いてゐない。斯の如く、此の小文に紹介するところはただ管見に触れたもののみであつて、律師全生涯の業績が以上の所載に尽きるとする事は当らない。法金剛院に存する律師の墳墓はただ寺僧のみ知つて他の誰も知り得ない。之れ石塔の存しない為であり、律師の遺誠に依るものである。されば律師の学績がかくの如く埋れ去るのも或は故人の意にするところではないかもしれぬ。然し嘗て律師の手に触れ、嘗て律師の息を込めたであらう遺品を今我が手に触れ、その因縁の深きを想ひその無作の感応に催されては茲に

何事かあらざるを得ない、これ駄言を弄した所以のものである。(一七・一一・一六)

照山慧晃律師撰述現存目錄 合二十部五十九卷

俱舍論頌疏科 一卷	延宝五、	戒学院	刊
三十三過本作法纂解 三卷	貞享元、	法金剛院	刊 自(一冊)
律門伝律略記 一卷		戒学院	自
枳橘易土集 三十卷	享保元、	法金剛院	自
翻訳名義集弁説 一卷	享保三、	戒学院	自
菩薩戒通受遺疑鈔莊嚴記 一(卷)	享保八、	戒学院	自
首楞嚴義疏講義玄談 一卷	享保九、	法金剛院	自
律門異執儀 一卷	享保十九、	戒学院	自
延命地藏經疏(仮称) 一卷		法金剛院	自
×××			
唐招提寺戒壇別受戒式 一卷	元禄十一、	正蔵・七	五
誦経導師法則 一卷	宝永二、	戒学院	写
伝法灌頂記 一卷	宝永五、	戒学院	写

念仏会法則 八卷 享保六、七、 戒学院 写

靈供作法并諷誦 一卷 欠

請雨經法自明次第 一卷 享保十、 法金剛院 自

両部合行略次第 一卷 享保十八、 戒学院 自

×××

招提寺入寺記 一卷 享保六、 法金剛院 自

泉涌寺舞樂受茶羅供記 一卷 享保十一、 法金剛院 自

国師加号勅使御登山記 国師五百年忌記 二卷 享保十一、 法金剛院 自

照山泉涌寺住持記 一卷 享保十一、 法金剛院 自

小品八略ス

孤山雁信 赤谷明海書翰集 一 (一九)

原田憲雄編

★1964. 10. 10. 原田憲雄宛。手紙。差出住所、宇治市伊勢田町中山七三。

木犀の香が流れただしたと思うまもなく、はや小花が散り敷いて秋はいよいよ深くなっていくようです。

先般来、御手紙を頂戴したり、図書目録をお托しいたりして、すぐにも御礼の御返事を出さねばと思いつながら、家にあつては学校の余暇に書こうと思ひ、学校へ出れば家に帰ってからと、思ひだけを持ち歩いてゐる始

末で 全くお話にならない暮しぶりを続けています。こんなことで甚だ失礼をいたしました。

図書館員の補充のことで御配慮を煩わしましたが、女子大の方に交渉するまでに臨時手伝ってくれる人が見つかりましたので、依頼に行きませんでした。御迷惑をおかけしましたが この件は又の機会にお願いいたします、田舎の母の事、御懸念いただき恐縮でございます。夏休みに帰ってから そのままですが 便りでは相変わらずとのこと、とても元通りになることは期待できませんが、格別どうということはありませんので 御放棄いただきとうございます。

四国旅行に続く東京での講習会参加など、調子にのって走り廻ったのがいけなかったのか、先月中旬頃から妙な熱が出たりして 学校から帰るとまず寝ることに専念し、ひたすら自重自愛、元氣のない日を送っていました。疲れのせいか血沈は悪いのですが、レントゲンの結果は以前と変わりありません。大事をとってバスなどの化学療法を受けることにし、目下手続き中ですが、勤めを休むほどのことはありませんので 悲観もしていません。然し勤めだけが精一杯というのはいくじのない話、そのうち様子をみて 追々と身体の事から解放されるよう努める積りです。

この前の台風で大分荒されましたが、菊の蕾がそろそろ開きかけています。十数種の苗を植え込んでおいたのでどんな花になるか楽しみです。風で痛んだ柿の葉が次から次へと落ちていきますが 次第に色づく実が いよいよ鮮かに目立ってきました。近所の野原にはキリン草の黄色が そろそろ浪打ちはじめました。もう一週間もすれば真黄色に塗りこめられることでしょう、お暇があればお遊びにお越しください。

亜土君から北海道のお土産をあれこれ頂戴し、かえって御迷惑をおかけしたような事になってしまいました。以上たまたまっていた失礼のお詫びを申しあげると共に、身辺の些事を報告いたしました。

母上様をはじめ皆様によりしくお伝えの程を。十月十日 赤谷生 憲雄大兄御座下

★1964.10.25. 同宛。手紙。たぶん平安高校生だった原田亜土に托したもの。

折角、駕をまげていただいたのに不在にして失礼、正に平生掩扉多しへ王維の詩句へ。それも戸をたてて中で読書でもしていれば、まだしもですが。

『王維』へ『漢詩大系』一〇へ有難うございます。長い間こつこつと続けられた『方向』の成果の一端をみるようで、これによって君の存在を広く世に問うことになるでしょうから、同慶の至りです。それにしても、小林へ太市郎へ先生の未完成のあとをついで纏めあげるといふ、至難の仕事、一面からすれば労のわりにむくわれるところの少い仕事をよくもまあ仕上げられたもの、君ならではと思います。

今日は日曜ですが、文化祭で登校しています。身体の方、手続きが終わらないので、まだパス、ヒドラなどを使っていませんが、どうにか勤めの出来る程度の健康を保っています。

いずれ、そのうち茶の実を拾ってお届けしますから、その節、万々申しあげます。とりあえず御礼とお詫びの御挨拶まで。十月二十五日正午 赤谷生 憲雄兄

★1965.1.1. 同宛。印刷年賀状。

★1965.1.27. 同宛。葉書。

王維につづき韓愈へ『漢詩大系』一一を御恵贈いただき何とも有難く、楽しんで読まさせていただきました。それにしても多忙な中を次々と業績を積み重ねていかれること感じ入ります。小生の学ばねばならないところですが相変わらず怠けぐせからぬけられず在舊と日を重ねている次第、おはずかしいことです。毛利部隊の記事へ『韓愈』にはさみ込みの「月報」に原田が書いたを拝見し「王維」の出版の生んだ縁であることを思い、「韓愈」の一波が万波をよんで拡大していくことを予想しています。一面煩わしいようなものの又楽しみも多かろうと同慶に存じます。とりあえず御礼の御挨拶まで。

★1965.2.4. 同宛。手紙。

学校への電話連絡がつき兼ねますので幸便に托します。

一、橋川正氏『鞍馬寺史』、御校の図書館にありましたら借覧いたしたく、二週間程貸出し願えないでしょうか右につきよろしく御配慮の程願います。

高三の卒業試験終了、目下採点や評価の最中ですが、授業から全く解放され のんびりしています。春寒殊の外酷しい頃ですので御自愛の程願います。二月四日 赤谷生 原田憲雄様

★1965.2.8. 同宛。手紙。

先日は感々辺鄙なところまでお運びいただき御迷惑をおかけしました。すぐ癒るだろうとたかをくくっていた風邪が案外にしぶとく、昨夜は八度近い熱が出て今までもっとも悪い状況でした。幸い今朝は平熱だったので、止むを得ない事情もあって登校しましたが、大事をとって尚二三日の休みを貰い、すぐ戻ってきました。結核の

前歴があることとて 風邪をひけば 他の人より長びくことは致し方がないとしても、近頃頼りにキやネバリの
なくなつてしまつた事を自覚させられ、抗しがたい年令上の衰えを思わぬ訳には参りません。

郵下を越え、置一枚分も射してくる暖かい光を受けながらじつと部屋の中に閉じこもっているのはもどかしく残
念なことです。

ところで、お便りにありました法金剛院庫裡の離れにいたという画学生の事、小生全く存じません。離れとい
うのは恐らく例の蕪茸の茶室（隠居所）のことでしょうが、戦後二十四年に保育所に改造するまでは 版画を彫つ
ていた森氏の一族に貸していたように思いますし、三根さんのいたのが戦前だったか戦後だったか忘れましたが
昭和十年から小生が花園に住み出して後、増原氏に貸し、その一室に北野正男氏がまた借りしていた程度のこと
しか思い出せません。庫裡には多くの学生がいましたが、龍大、立命、織維大生以外の者はいませんでした。余
程以前の事でしょうか。

花園へも長い間行きません。こんど地藏院の由里、野口の両氏が立退くといつてきましたので、床を離れ次第
事情をききに行く積りです。

教え子で創価学会の青年部の仕事をしている者があり、これを読めと 池田大作氏訳註の撰時抄を送つてしまし
た。いまだ一度も日蓮聖人の著にふれたことがなく、仏教史の立場からも必要なことですので 精読するつもり
ですが、これについてまた教えを乞う時があるうかと思ひます。

以上御返事をおね近況些事に及びました。二月八日 赤谷生 原田憲雄様

「羅漢さんがそろったら回そじゃないか。」とうたう子どもの遊びがある。

集まった子どもが手をつないで輪になり、まず誰か一人が、となりの子どもとつないだ右手の方へ右足の甲を裏むけてかける。そうすると膝が折れてくさびの形ができるから、その左側にいる子どもが右足の甲をそこにかける。そのようにして、左の子どもへ順に足をかけていって、最後の子どもに、一ばん初めの子どもを移すと、みんなの足で一つの輪ができる。そこでつないでいた手を離し、左に向いて片手で跳びながら、「羅漢さんがそろったら回そじゃないか、よいやさのよいやさ、よいやさのよいやさ。」と手拍子を打って回るのである。

そのうちにリズムに遅れた子どもや、足の痛くなった子どもが調子をくずしてくる。かけた足がはずれたり、誰かが転んだりして、みながしろうぎ倒しのようにくずれて、キヤッキヤツと笑う。それだけのことで、単純な遊びだから、今の子ども達に教えても、その時だけで後からはもうしていないようである。

十一月はじめに、ともだちの自動車に乗せてもらって、愛宕念仏寺へ行った。以前から行ききたかった西村公朝師のお寺である。このお寺には、公朝師の指導で、信者達の刻んだ羅漢さんが、もう千体以上も集まっておられると聞いていた。

嵯峨の鳥居本から清瀧へ越える少し手前の山間にあり、若い人でにぎわう嵯峨野からは、やや離れていて、時

時タクシーでやってくる人や、お年寄りの団体がぞろぞろと来て、また忙しく帰って行く、ひっそりとしたお寺であった。

朱塗りの色合いも程よく沈んで、あまり華やかでない門をくぐると、さっそく石に刻まれた二体の小さな仁王像が迎えてくれる。そのまわりには、美しく紅葉したもみじが葉を散らしていた。庫裡の前には、のみを入れ始めたばかりの羅漢さんが、まだ形を現わさず、四角い石のまままで並んでいる。誰かが、時間をみつけてやって来て、少しずつ彫りおこしているのだろう。

羅漢洞の下をくぐり抜けて、滝の下に並ぶ羅漢さんにまずおどろいた。陽がほとんど射さないからか、もううつすらと緑の苔がつき初めている。両手の上にあごをのせ、そらを仰いで満足そうに笑っている羅漢さん、合掌して黙想している羅漢さんもあれば、となりに話しかけている羅漢さんもある。

少し高い石垣の上に、公朝師の彫られた誕生仏が立ち、その両脇に五体ずつ十大弟子が並ぶ。これは東京芸大の、公朝師の学生さんが彫ったものと聞いた。小さな滝の音が、たえまなく続いて、すぐ外を、清瀧へ行くバスや自動車が走っているが、その音も聞こえず、不思議な別世界をつくっている。

そこから少し登って右へ折れ、仏・法・僧をあらわす三つの金色の鐘を釣った楼を通り抜けて、更に左へ折れて登ると、本堂の前の広い境内へ出た。周囲はすぐ山になっていて、まだ午後二時を過ぎたところだというのに、陽は山の後方へかくれ、夕暮れのように空気がしんと冷えている。すっきりと簡素なお堂をかこむように、山の中腹までびっしりと羅漢さんが並んでいた。

小高い山のやや開けたところに、おなじく公朝師の刻まれた、ふっくらと美しいお釈迦様が、赤い衣を来て立っておられる。その後ろから両横にずらっと山の斜面を埋めるように羅漢さんがいっぱいなのである。



首を傾げてうっとりしている羅漢さん、子どもを抱いて頬ずりしている羅漢さん、酒を汲み交しているのもあり、少し寂しげにうつむきかげんの羅漢さんもある。わたしもこの中に入ってこっそり座っていたいような気がする。ここにいとほんとうに気持ち解放される。とらわれない心の透明さが見えてくる。

羅漢さんの遊びが他にもあったのを思い出した。輪になって左側の人の形を真似て右の人に送って行く。鼻をつまんだり、耳をひっぱったり、こぶしをあごにくっつけたり、おでこをたたいたり、一よいやさのよいやさ。」と順に一つずつ送って行っ

てだんだん速くするのである。

盛り上がった両頬の真中に小さい鼻をつけ、歯のない口をあけて、顔ぢゆうで笑っている羅漢さんがあった。誰かに似ていると思ったら、わたしの祖母だ。わたしたちは、離れて暮らしていたので、この祖母と近い所で暮らすようになった頃には、祖母はほとんど耳が聞こえなかった。そのせいも、よくひとり合点をして笑っていた。父の軍服を解いて、母が作った小さな上着で、弟が跳ねるように走っているのを見て、祖母は、「まあん、これはどうじゃいね、まるで柿の葉の雀じゃわ。」と歯のない口をあけて、ハアハア笑った。

わたしの鼻が小さいのはこの祖母に似て、肌の色黒は祖父に似たといわれている。

一世の中には美しい人も多いのに、ちょっと不公平やおもいませんか羅漢さん。」

「色即是空、空即是色やろう。」

思いもかけない声でした。

「あつ、その声は富士さん、富士正晴さんでしょう。ここに来てはったんですか。死んでからまでわたしのことをからかおうと思って。いいんですよ、ちょっと言うてみただけなんです。美人には美人のしんどさがあります。今さら美人にしてもろうても、もうじゃまくそうてかありません。」

「無理して言うてるで。」

「そんなことはありませんよ。これがわたしや、これがあんたやと、こだわらなんだらいいんですやろ。ここにいるのもわたしやけど、吉永小百合も聖子ちゃんもわたしやと思うたらそれでいいんですやろ。」

「へえ、あんたてえらい欲が深いんやな。まあええ、その代り、あんたとこへまんじゅうもらいに来るおつきんも、そこに遭うてる毛虫もみんなあんたやで。」

「そんならわたしがきのう殺した毛虫は、わたしやったんですか。」

「そういうことや。どこやらで爆弾しかけて人殺ししてるのも、それで死んでるのもあんたや。」

「なんやそこらが痛うなってきたような気がしますわ。色即是空て恐いもんですね。」

「ところで、あんたとこのおしよは元気か。」

「ああそのおしよさんが、いつも言うてます。あれもまぼろし、これもまぼろし、まぼろしを食べて、まぼろしを着て、わたしがここにいると思うのもまぼろしやて。」

「ふうん、そうか。あんた、もうそろそろ帰らんと、そのおしよのまぼろしが、腹をすかしてるのとちゃうか。」

「そうです、まぼろしのわりには時間にうるさいんです、もう帰らんとあきません。また来ますわ。」

「もう来んでもええ。」

「またそんなこというて、富士さんはわたしのこと、気持ちのわるい人やて、おしよさんに言わはったんですやろ、いつでもわたしはそのことを気にしてます。」

「あほやな、そんなことわしは知らん。そやからあんたは気味がわるい。」

「ほら、とぼけて、やっぱり言うてはるやないですか。そやさかいに富士さんはずるい。」

富士さんは、もう、どこかへ行ってしまったようである。

人の気配のなくなった境内で、ともだちは黙ってわたしを待っていてくれた。わたしたちは羅漢洞を降りて、ちいさな仁王さんの辺りで落葉をひろった。

「こんな美しい紅葉を便箋に押しして、手紙を下さる方があるのですよ。」とわたしがいうと、ともだちは「へえ、わたしそんなのもらったことないわ。」といった。「そんなら今度、わたしがこのもみじを押しして手紙を書きますわね。」うん楽しみにまってるわ。「わたしたちは顔を見合わせて笑った。

家に帰って夕食をすませ、暗くなってから門を閉めていると、前の通りを小柄なおばあさんが、エプロンをして歩いて来た。

「あらこんばんは。しばらくお見かけしませんでしたけどお元気でしたか。」

とわたしが声をかけると、おばあさんは、

「こんばんは。おじいさんが入院して、ずっと付き添ってましたんや。」
といった。

「そうでしたか、それでもう。」

よくなられたのですね、とわたしが言おうとしたら、おばあさんが、

「ええ、それでもうあの世ゆき。」

と話を引き取った。

「あの世行き、それは寂しくなりました。」

「ええ、丈夫な人で、八十二才までお医者さんにかかったことなし、初めて診てもらった時には手遅れでした。肺炎で、片一方のはいがもうあかんようになってたんです。先生が、若い人なら手術もするんやけど、年やさかい無理やろなあて言うて、メスも入れず、四十二日間入院してました。遠いところにいる息子も家族も来て、あっちこちにいる孫もみんな来ました。おじいちゃんがんばりやて言うて、代りおうて付き添うて、だいじにだいにじにしろて、最後は、ねむるが如くに逝きました。先生、これでほんまにしまい？してわたし言いましたんやで。らくにらくに、あんな死に方やたらわたしも早う死にたいですわ。」

「そうでしたか。極楽往生でしたんやね。そこまでいくのには、もうちょっと頑張らなあきません、元氣を出して下さいよ。」

「ええ、そんなんで、人の出入りが多かったさかい、わたしも疲れて肩がこってかなんので、あんなさんへ行こうと思うて来たんです。」

「はあ、なるほど。」

「おじいさんは指物師でしたやろ、そやさかいに息子が、お棺の中へ物指しを入れてやろうかていうたんです。わたしがあんな、死んでからまで仕事をさす気かといいましたんや。そしたら孫たちが、孫がみんなで十人いますんやけど、その孫がみな二階にあがって、それぞれにおじいさんに手紙を書いて持って来ました。お棺の

中へ手紙を十通も入れてやったんです。」

「へえ、それはいい。それはよかったです。子どもでなんて素晴らしいことを考えるんですやろ。」

「それで、あの一ばん小さいのはね、〃あんだ、なんて書いたの〃てわたしがたずねたら、〃おじいちゃん、ぼくをものすごくかわいがってくれてありがとう〃て書いたって。」

おばあさんは子どものような可愛らしい声を出して言った。一ばん小さいのというのは外孫だけれども事情があつて、三年余りあずかり、おばあさんが、この道を通つて、保育園へ送り迎えしておられたのである。今は、親もとに帰つて小学校二年生になっている。

「なんとまあ、そんないい手紙を持っていたら文句なし、おじいさんは今ごろ、すうつとまっすぐお浄土ですわ。」

「それから、ゆうはね。」

ゆう、とは、ゆたかといって、近くではないが市内にいる孫で、小学校四年生のときにわたしが担任した。もう高校生になっている。

「ゆうは〃おばあさんを守つてあげて下さい〃て書いたって。」

おばあさんの目に涙が光るのが見えた。

「さすが大きいだけあつて、よう考えてはりますわ。そんな立派な手紙を十通も持つてあの世へ行った人なんて、聞いたことありません。幸せなおじいさんでしたね。」

話が終わるとおぼあさんは、マッサージ・はり、と書いて、あかあかと電燈のついた大きな看板の方へ歩いて行った。

「ランカカ、カビ、サンマエイソハカ。これは憶えたばかりのほやほやですが、お地藏さま、孫の手紙を十通も持ったおじいさんを、どうかよろしく願います。」

わたしは門のかんぬきをはめて、枯れたすすきの間から空を見上げたが、この時刻にはまだ、月は出ていなかった。富士さんはもう、今頃どこかへ飛んで行って、また誰かと話しこんでおられるのだろうか。

※前号正誤 23頁5行 シャーブトラー↓シャーリプトラ

老いたる弟子

法華経巡礼 7

1987.11.17.

原田憲雄

マハーカーシャバにつづくウルヴィルヴァカーシャバ、ナディーカーシャバ、ガヤーカーシャバの三人は、マガダ国のバラモンの兄弟で、ウルヴィルヴァが長じ、ナディーが次ぎ、ガヤーが二人の弟とされる。正本・妙本ともに何故かガヤーをナディーに先だてる。三人の名はそれぞれ「ウルヴェーラーに住むカーシャバ」「ナイランジャナー河のほとりに住むカーシャバ」「ガヤーの町に住むカーシャバ」という意味だったらしい。ウルヴェーラーは国都ラージャグリハの西の地。兄弟については、南伝の『マハーヴァツガ』、北伝の『増壹阿含経』な

どに、伝がみえる。

三人とも祭火行者でウルヴィルヴァは五百人、ナディーは三百人、ガヤーは二百人の弟子をもち、マガダ国の偉大な宗教家として名声は遠近にとどろいた。釈尊は「五人のピク」を教化した後、ウルヴィルヴァカーシャバを訪ね、聖火堂に泊めてくれと頼んだ。ウルヴィルヴァが「毒龍がいるから危険だ」と断わったが、強いて許しを得て泊り、毒龍を調伏した。ウルヴィルヴァは驚くが、それでも悟達した自分には及ばないと思う。釈尊はさらに様々の神変を現じ、ついにウルヴィルヴァは信服し、五百人の弟子たちと共に、釈尊の弟子となり、螺髪を切り、祭火具とともに、ナイランジャンナー河に捨てた。下流にいた二弟がこれらを見、兄を訪ね、事情を聞き、彼らもまた弟子たちと共に、仏弟子となった。

釈尊はガヤーの山で泊まることにし、夕方、都の街々に火が燃えているのを見て、弟子たちに説いた。

われわれの外部の街々に輝いて火が燃えている。われわれの心の中では、むさぼりや、怒りや、愚かさなどの煩惱の火が燃えさかり、感覚し、知覚し、思念することのすべてが燃え、さまざまな苦悩を受ける。このことをありのままに正しく観察し、誤った感覚、知覚、思念を厭い離れるなら、むさぼり、怒り、愚かさの三つの毒の火は消え、苦悩の原因や条件は除かれる。火を祭り、火に仕えるよりも、火を消し、火を滅ぼすことによって、束縛から解脱するだろう。

この「燃える火の教え」を聞いて、一千人の新しい弟子たちは、アラカンの悟りを得た。

釈尊はラージャグリハに向かった。国王のピンビサーラは、ゴータマが悟りを開いてブッダとなり、郊外に来

ていると聞き、群臣を連れて迎えにいった。挨拶を交し、それぞれ座についたとき、群臣の間に疑いが生じた。

「若い沙門のゴータマが、老いたウルヴィルヴァカーシャバに師事しているのだろうか。それともカーシャバが、沙門の弟子になっているのだろうか」

群衆のこの疑問を察したウルヴィルヴァカーシャバは立ち上がり、釈尊を礼拝し「ゴータマは、わたしたちの師、わたしたちは弟子です」といったので、人々はそのことを知り、国王は教えを受けて信者となり、竹林を精舎として寄進した。

カッサパ三兄弟については、この外にあまり伝えられる事がない。しかし、釈尊の名が世間に広く知られ、教えを聞こうとする人が次第に多くなるのは、これ以後であることからして、釈尊の伝道生活における重要な事件だったというべきだろう。『法華経』の「從地涌出品」には、二十五歳くらいの若者が、百歳ほどにも見える老人を指して「これはわたしの生んだ子」といい、老人が若者を指して「これはわたしの父」という譬喩や、「随喜功德品」の、髪白く顔もしわだらけになった人たちを見て、世尊が「間もなく死を迎えるこの衆生のために、真の道を教え、悟りを得させよう」という言葉などが、三カーシャバの教化に由来するとすれば、『法華経』にとっても、重要な故事だ、ということになる。

『テラガーター（仏弟子の告白）』には、三人の詩が書留められているが、ウルヴィルヴァの詩句だけを、次に引いておこう。訳者は中村元氏。

名声あるゴータマの驚異的なはたらきを見て、わたしは嫉妬と傲慢に欺かれて、最初のうちは、かれにひれ

伏すことをしなかった。375

わたしの意向を知って、人間たちの御者（ブッダ）は、わたしを促した。そこで、わたしには、不思議な、身の毛もよだつ感激が起こった。376

以前にわたしは結髮行者であったが、そのときのわたしの神通力は僅かのものであった。（釈尊に会った）そのときに、わたしはそれを捨て去って、勝利者（ブッダ）の教えにおいて出家した。377

以前には、祭詞を行なうことに満足し、欲望の領域に心が乱されていたが、のちには、欲情と嫌悪と迷妄とを根こそぎにした。378

わたしは前世の状態を知っている。わたしのすぐれた眼（天眼）は浄められた。神通力をそなえ、他人の心を知るものであり、優れた聴力（天耳）を獲得した。379

わたしが在家の生活から脱して出家したその目的である（あらゆる束縛の消滅）を、ついにわたしは達成した。380

次はシャーリプトラ。この人は、次いで名の出るマハーマウドガリヤーヤナとは幼少からの親友であり、共に仏弟子となり、「十大弟子」といわれる釈尊の高弟の第一と第二に位置する人だから、共に語るべきだろう。ことにシャーリプトラは大・小乗の經典のほとんどあらゆるところに姿を現わす重要な人物だから、次回に述べることにして、ここでは「十大弟子」につき簡単な説明をしておきたい。その十人の名と特色は次の通り。

- ①シャーリプトラ 智慧 ②マハーマウドガリヤーヤナ 神通 ③マハーカーシャパ 頭陀 ④スプーティ

解空 ⑤ プールナマイトラヤニープトラ 説法 ⑥ マハーカーティヤヤナ 論議 ⑦ アニルツダ 天眼 ⑧

ウバーリン 持律 ⑨ ラーフラ 密行 ⑩ アーナンダ 多聞。

この十人を釈尊の弟子の代表として纏めて掲げた經典のもっとも早いものは『維摩經』で『灌頂經』がこれに次ぐ。『維摩經』では、釈尊の弟子の代表ではあっても、みな維摩居士に翻弄される役割をふりあてられ、あまり冴えないが、中国や日本では尊崇され、その像が、描かれ、刻まれた。中国では敦煌の彫像・画像が知られ、日本では、奈良の興福寺七三四年造の立像（六体のみ）、京都の大報恩寺（千本釈迦堂）清涼寺（嵯峨釈迦堂）の平安・鎌倉の立像、禅林寺（永観堂）の画像が有名だ。

『法華經』の序品と『維摩經』の「弟子品」と、どちらが早く成立したのかわからぬが、両者では釈尊の弟子に対する評価の違うことが、弟子の名の挙げかたの違いから察せられる。

『法華經』に見えるアージュニヤータカウンディニヤ（等の五比丘）が十大弟子のうちに見えず、十大弟子のうちに見えるウバーリンの名が『法華經』に掲げられていないのが、その違いである。

違いの出でくる理由は、想像するほかはない。五比丘は、釈尊の最初の弟子というほか、業績などもよく分かっているないので、大乘教徒の間で重んぜられなかったのかもしれない。現にこの人を挙げる『法華經』にしても漢訳両本が、五比丘をアージュニヤータカウンディニヤで代表させ他の四比丘を挙げないところに、その消息が伺われる。ウバーリンの名を掲げないのは、『法華經』の戒律觀が、小乗のそれと異なることはもとより、大乘諸派のなかでも特異であったことを物語るのではなからうか。